



117号
2006/10/1

日中文化交流市民サークル「わんりい」
東京都町田市能ヶ谷町1521-58 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>
Eメール: wanli@jcom.home.ne.jp
Eメールのアドレスが上記に変更になりました。



雨の日の子どもたち (中国四川省甘孜藏族自治州理塘県にて [2004年8月]) 鈴木晋作撮影

「わんりい」117号の主な目次

北京雑感その⑦「北京の公園」	2
媛媛来信 ⑦「壺口瀑布—黄河の魂」	3
「陝北女娃」⑫〈反反と改改〉	4
「陝北女娃」〈反反和改改〉原文	6
わたしが調べた四字熟語 ⑥四面楚歌	7
大姑娘山登山之記	8
中国を読む ⑦ ものがたり史記	10
韓国ドラマを旅する	11
アフリカとの出会い ⑫知られざるナイロビ証券市場	12
松本杏花さんの俳句「拈花微笑」より	13
キャンディロードの蒸気機関ロードローラー	14
僕とスリランカの出会い	15
「わんりい」掲示板	16

♪ 中国人歌手趙鳳英さんと一緒に歌おう! ♪

「中国語で歌おう!会」

まちだ中央公民館で新規発足 会員募集中! 無料体験参加歓迎
会場: まちだ中央公民館 7F・第一音楽室

JR 横浜線町田駅八王子寄り改札口徒歩2分、小田急
線南口徒歩5分 町田東急裏109ファッションビル7F

会費: 1,500円 (一回ごと)

【10月の練習日】 10月6日 (金) 19:00 ~ 20:30

xiǎo chéng gù shì

練習曲: 「小城故事」

「喜びや楽しいことがいっぱいある小さな町、どうぞ遊び
に来てください」とテレサテンが歌って、広く愛唱された
素直できれいな歌。思わず口ずさみたくくなります。

指導: 趙鳳英 (元中国重慶歌舞団歌手、四川音楽学院講師)

* 体験参加が無料になりました!
皆様のご参加を歓迎します。

ご存知のように、北京は公園の多い町です。東京でいえば、23区内と言った位置づけ(尤も、これは私の勝手な解釈ですから、異論は多々あると思いますが…)の三環状線の中でさえ、玉淵潭公園、蓮花池公園、北海公園、朝陽公園等等があり、皆、大きな池を抱えています。北京の公園は、池を中心にした公園が多く、その池の大きさと言ったら、日本庭園の築山とセットの池からは、想像も出来ないものです。

北海公園など、これが北京と言う大都会の中心にある公園かと眼を疑ってしまいます。そして、この池の水は、国家組織の中心がある、中南海に繋がっているせいでしょうか、とてもきれいです。周りには大きな街路樹が多く、昔ながらの家並みが続いたりして、不思議な雰囲気醸し出しています。この辺りは、北京市が、古い四合院を残そうと、遅まきながら、動き出し、家の改築に、古い色のレンガを使えば、補助金を出すことにしたそうで、あちこちに、灰色のレンガの塀が出来つつあります。

北海がくびれて、北海公園が終わっても、水は后海へ続いています。后海の回りは、公園ではありませんが、道筋や、建物の雰囲気は北海の周りと同じで、補助金も出ているそうです。でも、この辺りは、既に、古い感じをそのまま使って、ちょっと趣のあるお店や、バーが出来ています。道を隔てて、水が見える所で、鬱蒼とした街路樹の下に、テーブルや椅子を出し、中には、屋上にもテーブルを置いて、緑に手が届くような席を設けているところもあります。散歩の途中で、あんなところに腰掛けて、一休みできたらいいなあと思いますが、これらのお店は、夜になるとバーになるので、昼間といえども、独りで入るのはちょっときがひけます。この辺りは、夜見ると、ネオンの色がきれいなところなんです。今までは、バーと言うと、朝陽区の三里屯が有名でしたが、最近は、若い人達がこちらへ出てくるようになったそうで、三里屯は、ちょっと寂しくなったと聞きました。

バー街の道は、昼間の散歩にもいい道ですが、狭い道端に、自動車が駐車していて、歩きにくくなってきました。いっそのこと、自動車は進入禁止にして、観光用の人力車を、生活の脚に使ったら良いのではないかと思うのですが……。

北海公園は、公園の中ばかりでなく、周りもきれいな公園ですが、それと対比的なのが、蓮花池公園です。この公園の歴史は古くて、北京が北京になる前から、ここにあるのだそうですが、公園の周りは、あまり綺

麗ではありません。

私が初めてこの公園に行った時は、西門の近くでバスを降りたのですが、知らずに南の方へ歩いてしまい、南の門があるだろうと、更に東へと、公園を左手に見ながら歩いたのですが見当たりません、道が少しずつ公園から離れていくので近寄りたと思うのですが、その方向には、とても公園に続いているようには見えない、言葉は悪いのですが、貧民窟のようなところがあるので、その道には入らずに行くと、大きな交差点に出て、公園が終わったことが分かりました。この交差点を北に行けば北京西駅があり、そこに入り口があるのはわかっていましたが、南の入り口がどうなっているのか知りたくて、近くの人に聞いたら、あの貧民窟の入り口のようなところに入って行くようにと教えられました。

思い切って入っていくと、公園の塀を頼りに屋根をさし掛けただけのような家が並んでいましたが、その先に、それらの家々と同じように貧相な門がありました。あまり利用されているようには見えませんでした。人がいて、入園料3元と書いてあったので、やっと公園の中に入れました。門を入れて暫く行くと、大きな池が目の前に広がりました。周りを歩くと、緑が多く、よく整備されていて、小さな岩山から水が流れ落ちているところもあり。蓮の花の季節は終わっていましたが、水面に蓮の茎がいっぱい残っていて、花の季節には綺麗だったろうと想像でき、ぜひ花の季節に来てみようと思いました。

そして、今年、花の季節に又行ってみました。蓮の花は期待に違わずすばらしく、南西側の岸から、手前に蓮の花を見て、対岸に朝もやにけむる北京西駅の駅舎を望むと、ちょっとした墨絵の雰囲気を味わうことが出来ました。

朝7時前にバス停に着いたのですが、バス停の周りや歩道橋にはごみが散乱していて、足の踏み場もない状態でした。人も多くて、食べ物屋さんがいっぱい出ていました。雰囲気が雑然としていて、とても、あんな綺麗な公園の外側とは思えません。北京の意外性には大分慣れた積りでしたが、やはりショックでした。

ここは北京西駅に近いので、自動車を利用する人たちが朝早くから利用し、ひょっとしたら夜をすごした人もいたのかも知れません。そして、清掃の人たちの活動前なので、あんなに散らかっていたと、考えれば、これも北京の顔の一つということが出来ます。改めて、北京の奥深さを感じます。

山西省のことを話しますと、どうしても黄河のことを語りたくなります。そして黄河について語ればどうしても黄河の魂ともいわれる「壺口瀑布」のことを話したくなるのです。

人民元の50元の紙幣の裏には、「壺口瀑布」の写真があります。黄河は青海省を源として流れ出て、四川省で北に方向を変え、甘肅省、寧夏回族自治区を抜け出します。ここまでの黄河は、悠々と広がり、穏やかでした。しかし、内モンゴル自治区に入り、オルドスの大地で陰山山脈にぶつかって東へ曲がらなければならなく、そうして曲がってから間もなくまた呂梁山に阻まれることになります。黄河は気性が荒くなり、南へ90度曲がると一気に黄土高原にある陝西省と山西省の間で「陝晋峡谷」を切り開き、黄土高原の黄色い土砂を巻き込んで滔滔と南下して行きます。



黄河はこの「陝晋峡谷」を通り抜けて初めて正真正銘な「黄河」に成るのです。

黄河は北から南へと、725kmほど晋陝峡谷を流れ下るとパッと開けた平地にでます。ここが「龍門」というところです。龍門は登竜門の故事で知られる場所です。龍門から更に壺口瀑布までの60kmの間は晋陝峡谷でも最も険しい谷です。幅数百メートルの黄河の流れは「壺口瀑布」に来て、急に幅50メートルぐらいまで絞られ、そして落差30メートルの深い滝壺に勢いよく注ぎ込み、まるで巨大な急須(中国語で茶壺)の注ぎ口から水が注ぎ込むようです。黄河の「壺口」に立てば、黄色い飛沫が天を蔽い、水の轟音が耳を震わせ、まるで天から滔滔と降り注いでくるような黄色い流れの迫りに誰でも言葉が失ってしまうでしょう。

「黄河の魂は、ここにある!」と「壺口瀑布」を見た人々はそう言います。

黄河が水上交通でにぎわっていた昔、「壺口瀑布」は唯一の難所でした。船がここへ着くと、人々や、荷物は

総て必ず船から降ろされ、船底の下に丸太を敷いて船を陸に引き上げ、大勢の人夫や牛馬で下流まで引っ張り、「壺口」を通り過ぎてから再び舟に乗り旅を続けたといわれます。

「壺口」の下流、3000mのところに、「孟門山」と言う長さ300mの小さな島が河の真ん中にあります。北魏の地理学家である酈道元が《水経注》に述べたことによると当時、「壺口瀑布」と「孟門山」は繋がっていたのですが、唐代の古籍《元和郡県志》では、「壺口」は「孟門山」の北から「千歩離れる」と述べられています。

つまり、「壺口」と「孟門山」は約1500mの距離が生じたことになります。現在は、「壺口」と「孟門山」は3000mも隔たっています。北魏から今日までの1600年の間に、「壺口瀑布」は上流の方へ3000mも移動したということです。

それはなぜでしょうか? 「水滴石穿」(水滴は石を穿る)と言う話があります。滔滔たる黄河の流れは壺口から幅30mの谷に流れ落ち、まるで傲慢な黄色い龍が石壁に阻まれて、何千年も荒れ狂い、片方は石、片方は水、両者が力比べをし続けた結果、岩石がどんどん砕かれ、滝壺は少しずつ上流の方へ移って来たのです。

しかし、専門家の調査では、「壺口瀑布」は今でも毎年3、4ミリの距離で上流の方へ移動しているのですが、80年代以来、「壺口瀑布」の雄大さが衰えて来ている傾向が見えます。原因は水の流量が少なくなり、土砂の量が増加した結果、水の流れる力が弱くなって、流れの広さと落差が徐々に小さくなって来ているのです。このままで行きますと、百年後の子孫は「黄河の魂である」壺口瀑布の現在の雄大さを見られなくなる恐れがあります。

ですから、壺口瀑布の景観を何時までも存在させるために、確実に黄河上流の土砂を保ち、黄河の断流を防ぐことは黄河流域の人々の課題になっています。

私の手に一枚の写真があります：牛に牽かせた荷車が坂道を登っている写真で、荷車の上にはおばあさんと小さな男の子が乗っています。そして、その男の子と同年齢くらいの女の子がふたり歩いています。1998年6月に黄河河畔に取材に出かけた折、偶然出会って写した写真です。私が道端で休んでいますと、坂の下からギイギイと車輪をきしらせながら牛車が上って来ました。登り坂なので、二人の女の子は車から下りているのですが、男の子はおっとりと車に乗ったままでした。

牛車の傍を歩いていた二人の女の子はなかなか探し出せませんでした。写真はいつもカバンに入れてあって、親しい人に会うたびに、訊いたりしていましたが、やっとその努力が報われて、この二人の子は黄河河畔の北山村の村の子ども達だと教えてくれた人がいました。2002年8月、私は北山村でこの二人の女の子に出会い、この二人の姉妹の一人は“反反”と呼ばれており、戸籍名は馮艷花ということ、もう一人は、“改改”といい、戸籍名は馮艷蘭ということ、彼女達の上に二人のお姉さんがおり、一人は飛飛、もう一人は鶴鶴、下には更に丁丁という妹と伯伯という弟がいると分かりました。この一連の名前には何か意図的なものがありそうです。そして5人の姉妹がオンドルの上で伯伯を取り巻くように一緒に写真を取る際、この家での伯伯の地位が分かるようでした。

2003年の春節は、私は黄河河畔で過ごしていました。目的の一つはこの地の人々の年越しの習俗を体験することで、二つ目は、春節は“家族全員集合写真”を撮影する最もよい機会だということです。陝北では、元日は家を出ない、正月2日は村を出ないという習慣があります。正月2日、私は撮影器機を全部背負い北山村を訪

ね、まっすぐに反反と改改の家に向いました。

案の定、家族全員が窑洞におり、いつもは延安で保母をしていて滅多に会えない長女の飛飛も帰っていました。子供たちの父親との取りとめない話しの中で、この子達の名前を付けるにはずい分頭を悩ませて、彼が中学を卒業していたのが幸いしたのだと知りました。彼は三人目の子どもが生まれて見ると女の子だったのでいささか焦り、上の二人の娘の飛飛も鶴鶴も家に男の子を連れて来ないなら、この子は反反と呼んで、逆になることを願い、四人目が男の子になるよう希望を繋いだのです。けれども4人目もやはり女の子で「前非を悔い改め、真人間としてやり直そう」と、この子には改改と名づけました。ところが5番目もまた女の子だったので失望はこの上なく、もう此处できっぱりと“釘”を打ってしまおうというので名前を丁丁としました。そんな真心が通じ、遂にその後男の子が生まれ、名前を“伯伯”としました。“伯”は古代中国では兄弟間で長男を指し、順次、“仲”、“叔”、“季”となります。

名づけに悩みそのありったけを使い果たしたとはいえ、それぞれの名前に父親の心の状態が見て取れるようで、学校に行って勉強したお陰といえるでしょう。正直な父親は、六番目の伯伯が生まれる前にもう一人女の子が生まれ、この子は2ヶ月目に人に貰われたと私に漏らしました。私はこの子に何と名づけ





たのか知りたくて、名前をつけたかどうか訊ねました。父親は、小さかったから名前は付けなかったと答えました。「今年何歳ですか？」と訊きますと、42歳とのことでした。

この度はどうにか反反、改改一家の家族全員が揃った家族写真が撮れました。全家族8人が自分の家である窑洞の前に並びますと、「伯伯”はもう5歳か6歳というのに、相変わらず大切な保護対象で父親の懐に抱かれました。帰りしなには私は冗談で父親に言いました。「若し、この伯伯が女の子だったらどうするつもりだったの？ やはり生み続けるの？」父親は笑い、周りも笑いました。しかし、父親の満足げな笑顔に一抹の苦味があるようでした。

2004年7月、私は再び北山村に行き、反反、改改の家を訪ねました。父母は山の畑に行っており、長女の飛飛、次女の鶴鶴は仕事で家を出てしまっていました。三女の反反は既に学校を止めてしまい、家事全般を任された存在になっていました。四女の改改、五女の丁丁は県の学校に通い、家族の宝である六番目の伯伯ももうすぐ小学校一年生になります。ちょうど畑から戻って来た父親も加わり、私は又この家族の集合写真を撮影しました。彼はいつものように子供たちの真ん中に立ち、タバコをくわえて、いかにも満足そうな表情でした。この後、私は反反と改改姉妹と一緒に写真を撮りました。言ってみれば彼女達がいたから、

この家の人たち皆と知り合えたのです。

現在の中国で、貧困線下の家庭、特に西部の未発達地区の農村の家庭では子沢山は普通です。しかし、この地を守って生きる善良で誠実な農民を簡単に責めることは出来ません。彼等は土地と家族数に応じて税を納入していますが、国によるどんな福祉劳保(福祉と労働保険)の待遇も受けてはいないのです。特に老齢となって歩行もままならなくなった時、彼等は一口の水を飲むのさえ思い煩うかも知れません。「子どもを育てて年を取ったら面倒を見てもらい生涯を終える」というのは、心の深いところで受け継がれてきた(農民の)気持ちであり、他の方法を見つけることが出来ないという現実もあるのです。

(田井記)



お姉さんと本を読む改改 2004年7月



左から 改改 伯伯 反反 隣の子 鶴鶴 2004年7月

反反和改改

zhōu lù
周路

我手头上有张照片：一辆牛车正在吃力地爬坡，车上坐着个老太婆和一个小男娃，而地面上行走着两个和男娃年龄相仿的女娃。这是1998年6月间在去黄河畔上采风时在路边偶遇所拍的一张普通照片。当时正在路边小憩，从坡底“吱、吱”地上来一辆牛车，因为上坡吃力，从车上下来了那两个女娃，可是那个男娃却稳坐在牛车上。

为了寻找这个“走在牛车边的女娃”，我没少费心思，照片总是装在包里，见到熟人便打听。功夫不负有心人，终于有人告诉我这两个娃娃是黄河岸边叫北山村子里的娃娃。2002年8月间，在北山村见到了这两个娃娃，知道这两姐妹一个叫“反反”，大名叫冯艳花；一个叫“改改”，大名叫冯艳兰。她们上面还有两个姐姐，一个叫“飞飞”，一个叫“鹤鹤”，下面还有一个妹妹叫“丁丁”，一个弟弟叫“伯伯”。听这一连串的名字，我感到有些意思。当五个姐妹簇拥着“伯伯”坐在炕上合影时，便清楚地看出“伯伯”在这家中的地位了。

2003年春节，我是在黄河畔上度过的，一是为了体验这里人们过年的习俗，二是因为这是拍摄“全家福”的最佳时机。陕北有个习惯：初一不出门，初二不出村，正月初二我背上全套照相设备来到了北山村，径直来到“反反”、“改改”家，果然全家人都在窑内，连平日不易见到的在延安当保姆的老大“飞飞”也在家中。和娃娃们的父亲闲聊得知，为给这群娃娃起名字费了他不少脑筋，幸亏他上学到初中毕业。他承认生到第三个女儿后有些着急，如果说前两个“飞飞”与“鹤鹤”没有给家中引来“雄性”，那么这个女娃就叫“反反”，反过来吧，希望第四胎能是男娃，但第四胎降生仍是女娃，只好取名“改改”，“痛改前非，重新做人”吧。当第五胎仍是女娃时，他失望到极点，干脆就叫“丁丁”吧，在此“钉”住，到此为止！心诚则灵，终于随后生下了个男娃，取名“伯伯”，“伯伯”在中国古代是对兄弟间老大的指称，其次是“仲”、“叔”、“季”。

多亏做父亲的多读了几年书，虽然取名字也让他耗尽脑汁。诚实的父亲还向我透露个秘密，在老六“伯



反反 2004年7月 北山村にて

伯”出生之前，还生了个女娃，在两个月大时送了人家，我追问是否取了名字。我想知道这娃应该叫什么呢。娃的父亲说太小，没有给取名字。问他本人今年多大年纪，答曰：四十二岁。

这次总算为“反反”“改改”一家拍到了满意的“全家福”。全家八口人，齐刷刷地列在自家窑门前，“伯伯”依然是重点保护对象，被父亲托在怀里，尽管他已经有五六岁了。临走时我和娃的父亲开玩笑：“如果这‘伯伯’还是女娃咋办？还要生吗？”，汉子笑了，众人也笑了，但汉子的笑容满足里有一丝苦涩。

2004年7月我再次来到北山村，来到“反反”“改改”家，父母上山干活了，老大“飞飞”，老二“鹤鹤”出远门打工去了。老三“反反”已经辍学，在家中承担着小主人的重任，老四“改改”，老五“丁丁”，在乡学校读书，宝贝老六“伯伯”也将要上小学一年级了。我再次为她们拍了一张合像。此时恰好父亲的从地里回来。他依然是站在娃娃们的中间，叼着个卷烟，神情自得，一脸的满足。而后我又为“反反”和“改改”姐妹照一张合影，是她们将我引到了这个家庭，认识了这个家庭的所有成员。

在当今中国，生活在贫困线之下的家庭，特别是西部欠发达地区的农村家庭，多子女是普遍现象。可是，又不能简单地去责怪这些固守在这片土地上的善良诚实的农民，他们按土地人口纳税，但是他们却享受不到国家任何福利劳动保障待遇，特别是步入到耄耋之年，腿脚不灵时，他们会为喝一口水而犯愁。养儿防老，养老送终，这是根深蒂固的观念，也是无可奈何的现实。

今回は大変ポピュラーな四字熟語「四面楚歌」を調べてみました。

例えば企業や、職場、学校、サークルの中で、自分の主張について周囲の賛同を得られず、それでも何とか主張を通そうとして頑張った結果、最終的に周り中を敵にまわってしまったような時、「今、我々の会社は四面楚歌の状況に置かれている。」「私は今四面楚歌の中に居るようだ。」等といった言い方が日常的に良く使われます。いつもの様に早速辞書を調べてみますと、

中日辞典(小学館)では、四面楚歌「敵に囲まれて孤立しているたとえ。語源：楚の項羽が漢の軍に囲まれたとき、漢の軍が周りで楚の歌を歌ったので、楚の民が漢にくだったのかと驚いたという故事から」とあり、現代国語辞典(三省堂)では、「敵の中で孤立すること。まわりのみんなから非難、攻撃を受けること」と載っています。

この四字熟語の出典は、史記(項羽本紀)であることが分かりました。

中国は紀元前3世紀のころ、超大国の秦が滅んだ後、楚の項羽と漢の劉邦が、覇権を争って激しい攻防を繰り返していました。項羽は、垓下という所にとりでを築いて立てこもりました。しかし軍勢は、楚軍(項羽)10万に対し、漢軍(劉邦)30万で、劉邦の軍は項羽軍の周囲を幾重にも取り囲んでしまいました。そしていよいよ決着の時が近づきました。

ある夜のこと、突然項羽のとりでの周囲の東、西、南、北、四方面から、項羽の祖国である楚の国

の歌が聞こえてきました。実はこれは漢軍の指揮官の韓信の策略で、自軍の中から楚の出身者を選び、楚の民謡を他の一般兵に教えさせ、一斉に歌わせたのです。

これを聞いた項羽は、「我々を取り囲んでいる敵の漢軍の中に、こんなにも楚の土地の人々がいるのか。もうすでに、楚の国は漢にとられてしまったのだろうか。」と驚きました。兵糧も乏しい楚軍の頼りは援軍の到来だけでしたが、これではもう援軍も期待できないと失望し、逃亡する将兵も後を絶たなくなりました。こうして項羽は自分の最期を悟ったのです。韓信の心理作戦が見事成功したのです。

余談になりますが、四面楚歌と楚軍の逃亡で観念した項羽が、垓下に残った将兵と最後の宴を行ったときに詠んだ詩があります。

我が力 山を抜き
我が意気 世を蓋えども
時 われに利あらず
我が驩 逝まず
驩の逝まざるを奈何すべき
虞よ 虞よ 若を奈何せん

驩は、項羽の愛馬の名、虞は彼の愛人の名と言われています。四面楚歌の場面を描く京劇の人気演目「霸王別姫」の中で、項羽役の俳優が悲憤をこめてこの詩を歌い、項羽の足手まといにならない様にと自刃する虞姫と悲運の項羽に京劇迷(京劇ファン)が紅涙を絞るやまばとなっています。

‘わりい’のおたより会員継続のお願いとお誘い

年会費：1500円 入会金なし 郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わりい’

‘わりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

「それぞれの国や民族が長い歴史の間に培った、それぞれの文化を知り、市民レベルでの国際友好活動を目指している市民ボランティアの会として、日本に外国の方が増え始めた1992年に活動が始まりました。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催したり、2月と8月を除いた年10回、会報‘わりい’を発行しています。

新規入会はいつでも歓迎しています。会費は、おたより制作費と送料及び活動のサポートに当てられています。活動の様子はおたより又は‘わりい’HPをご覧ください。

‘わりい’のおたより会員に申し込まれますと、会報送付の他、一緒に活動される仲間として、‘わりい’の全ての活動に参加できます。

問合せ：‘わりい’ TEL/FAX：042-734-5100

‘わりい’掲載原稿募集

‘わりい’は、会の皆さんで作る会報です。会の活動趣旨に添う原稿やイベント情報を募集しています。明るい楽しい内容でどんどんお寄せ下さい。出来るだけ早く掲載したいと思いますが、ページ数の都合で遅れることや若干手をくわえることもありますのでご了承下さい。また、会報へのご感想などもお待ちしております。

* 問合せ：‘わりい’事務局へ

■ 7月29日

日隆(3,200m)～老牛園子(3,800m)

〈騎馬〉 快晴、午後一時雷雨

長坪溝に向かう本隊と別れ、リーダーの李さん以下我ら7人は大姑娘山に向かう。

四姑娘山登山基地・日隆に来て3日、初日の巴郎山(4,500m)、昨日の夾金山(4,100m)と高地順化を兼ねた散策はしてきたが、やはり緩慢な行動でも息切れる高所の登山なので全員アルコールと無縁の旅。

山での不要品を宿に残し、主要装備等はお当地宅配便(馬便)に託し、ザックには雨具や昼食ほかの身軽な出で立ちで出発(9:30)。花海子入口で入山手続き、尾根の山道を10分ほど登ると馬立場、李さんが馬を割り振りし、乗り方を説明しているのに勝手に出発。殆どの人は馬の経験があり悠然と乗っているが、初めての私は何ともぎこちない。30分ほどで鍋庄坪、やれやれ!

鍋庄坪は四姑娘山のビューポイントか通常の観光客も多く小綺麗なトイレやゴミ入れもあり道も整備されている。ここで改めて李さんから馬の乗り方の指導、「登りは前傾、下りは後傾」といわれてもそこまで気が回らない。

樹林の狭い道に入り暫くしてひらけたエーデルワイスの群落で昼食(11:30)。樹林が次第に深くなり、狭い道に馬が掘込んだ溝が深くなるあたりで休憩(12:35)。ここが最後の常設トイレ(評判はよくない)。

道路の溝はますます深く雨でのぬかるみが思いやられる。我々も準備段階で長靴を用意すべきか悩んだが、四姑娘山自然保護区管理局の大川さんの現地情報と今日の行程を騎馬に変更したので雨でも長靴不要としたが、徒歩でぬかるみを歩くのはたいへんだろう。

あぶみを両側の段差にこすり付けそうに深く掘られた溝を登ること35分、勾配が次第にゆるくなり突然前方が



ひらけると眼下の海子溝の草原に黄色いテント群、今日のキャンプサイト老牛園子である。

S氏によると去年はテントサイトの近くまで海子となっていたとのこと、天気続きで水は少ないのか? ここで馬を下りキャンプへ。馬から離れられてやれやれ!(13:50)。

日隆からは尾根を超え隣の谷へ来たことになる。

このキャンプはシーズン中は常設のようで24時間運転の簡易水力発電も備え、調理・食堂・男女別&従業員別のトイレのテントがあり、宿泊テントは3人用ドーム型が約20張りに7～8人ほどのスタッフと充実している。加えて5人以上のスタッフが食事その他の世話に当たりおかげで山での食事もなかなかよかった。キャンプの利用者は我々の他に程なく降りてきた、大姑娘山に今日登山した関西からのパーティのみ。このキャンプと高所キャンプは我々の利用を最後に撤収という。今シーズンは終わりということか!

既に託送荷物は到着、テントの割り振り(3人用に2人で余裕)をして、食堂テントに用意されたお紅茶やハミウリなどでティータイム、何と空色の民族衣装のよく似合う可愛いウェイトレス達が給仕、当地のチベット人には美人が多いと聞いていたが微笑みを絶やさず明るい瞳と白い歯はまさに明眸皓齒。

くつろいでいるとにわかの雷鳴、大急ぎ各自のテントと避難したが風と共にパラパラ程度で通過、今回の旅唯一の雷雨はあつげなかった。

高所ガイドの明銘^{ミンミン}さんも到着、彼は日隆での我々の宿舎・日月山荘の長男で来春には日本に留学に来る。夕食には時間があるので高地順化も兼ねキャンプ地の上部を散策、草原や岩陰にはとりどりに花盛り。

富士山より高い老牛園子は寒いと聞いてはいた



老牛園子のキャンプ地



が、明日はさらに高地のキャンプなので今夜はテスト。薄手のシュラフ(羽毛)だけで寝たが23時過ぎに寒さで目覚め、ゴアのシュラフカバーを重ねても0時過ぎに目覚め、タイツや下着の着用は面倒なので合羽上下を着用したが腿の上側からの冷えが気になった。明晩は全て着込んで後は辛抱か!

夜明け前に起きたときはトイレへの通路の丸太橋に霜。なるほど寒いわけだ。

■7月30日 老牛園子(3,800m)~高所キャンプ(4,500m)

快晴

朝食も美味しく全員まずまずのコンディション。高所キャンプへの荷物をご当地宅配便に依頼し、ガイドの明銘さんを先頭、李さんがしんがりで出発(9:00)。さらにキャ



高所キャンプ地のティータイム

ンプのスタッフも加わり大部隊。ここまでほとんど歩いてこなかったで、今日からが登山。高低差700mが明日を窺ういわば試運転、ガイドの明銘さんはゆっくりした歩調で最初の休憩まで30分、隊列が伸びるのをみてかその後は15~20分ごとの小休止、一歩ごとに広げる後方視界と様々な花は心を和ませてくれる。

豊富な高山植物に比べ、動物はヤクなどの家畜以外はハクビシンの死骸を見たのみ。呼吸を意識しながら登る我々と対照的にチベット人スタッフ達は談笑しながら!彼らにとっては村の坂道に行くようなものかもしれない。正面上方のエンドモレーン上に高所キャンプの旗が見えるあたり(4,400m)で昼食(12:01)。

カールの底に入り左に小さな流れを見るように登るとキャンプサイト下の馬立場。李さんが明日の馬の手配の確認をして一登り(13:45)。

キャンプサイトは小さな崖の上に岩石を積み残したような二段のエンドモレーンでそれぞれの台地がキャンプサイトとなっている。我々は下段を利用。

上段は別の組織で運営のようだが今日は来客なしの様子。ここもシーズン中、常設で炊事・食堂・男女別トイレのテントがあり、なかでもトイレの用便後の砂かけは絶妙。宿泊テントは3人用ドーム型が5張り程。

届いている荷物を確認し、食堂テントで紅茶とハミウリのティーパーティ。ハミウリも山では一段と美味しい。今夜は松茸がでるとの情報に一同わき上がる。テントの割り振りをして各自整理。昨夜はしっかり着込まず寒さで安眠できなかったが今夜は毛布のオーバー寝袋を全員に貸してくれた。これで防寒は一安心!!夕食はここでも豊富、待望の松茸を見つけて箸を付けた人達の怪訝な顔!何とニンニクと松茸のバター炒め、確かに松茸の香りはするもののニンニに負けている。みんなの落胆や如何ばかり、すっかり箸が遠のいてしまった。以前雲南で「臭いキノコとしてあまり人気がない」と言われていたのを思い出す。ここでも香りはあまり珍重されないのかと改めて食べてみると歯触りや味には独特のものがあ、私には結構美味しい。おかげでもう一膳食事が進んだ。

食後は例により高地順化も含めた上部散策、このあたり



目指すはあの頂き

も高山植物の種類は多い。

早めに就寝、明朝に備える。標高が上がり視界が開けた分一段と星空が綺麗。

オーバーシュラフに加えTさんから分けてもらったホカロン？を足先に入れたので終夜ホッカホカ。

■7月31日 高所キャンプ(4,500m)～大姑娘山(5,025m)～日隆 快晴、午後一時曇り

いよいよ山頂アタックの日。その後一気に日隆の宿まで長駆(まさに馬だけ)なので早立ち(6:25)。今日は各自に一人のポーターが付く、こんな殿様登山をしたことのない庶民は戸惑いながらもなにか晴れがましい。ポーター達は食事その他の世話をしてくれたスタッフ達、もちろん民族衣装の美少女達も！今回の山行は全員満足だったがここに来て「至れり尽くせり」を実感。

いよいよ未経験の高度への挑戦。前日の歩調から李さんは最強のオーダーを編成して出発。昨夜は不調気味だったSさんも好調。先頭に行くガイド明銘さんは谷沿いにコルを目指してゆっくりと10分～15分ごとに休憩を入れて登る。谷が狭まり最後の急傾斜を登るとコルだ(7:50)。

景色は一変して眼前に雪をまとう主峰四姑娘山が屹立、眼下の日隆から彼方にはこの四姑娘山群なみの高峰の連なりが望める。しかし、それらの高峰すら当地では著名な山ではないという。ここから左に四姑娘山を見ながらはほぼ稜線左沿いに登る。僅かに残る雪田をかすめややきつい

斜面を登りきると大姑娘山頂だ。(9:10)。

山頂は360度の展望。期待のミニヤコンカはは望めなかったが、折から二姑娘山登攀をライブで遠望、好天に恵まれ撮影・スケッチ・水や食事と各自のんびり過ごすこと50分、全員で記念撮影をして山頂を後にした。(10:00)。

鞍部に戻るとキャンプ地は直下、上部の急斜面を慎重に下り2回の休憩でキャンプに帰着(11:30)。

ひとまずお茶、そして昼食は特別に中国のカップ麺、食後に各自の荷物をまとめて託送依頼し、下山開始(14:09)。

下山は恐怖の馬でだ。しかし、乗ってみると一昨日の経験で馴染んだか多少かたさもとれたようで景色も多少目に入る。今日は日隆に直接くだるので途中から右手の尾根にトラバースする。馬も下りは早く一昨日の最終トイレで下の道に合流(15:15)。登りは見る余裕もなかった仏塔を樹幹に見ながら鍋庄坪(16:35)まで下ると沢山の観光客。ここまでが一般向けの観光地となっている様子。山にカメラを向けている人も多いが今日は雲が出て四姑娘山は見えない。つくづく我らの好天に恵まれたことを感謝しつつ山を後にした。

今回は天候に恵まれ、それぞれ新しい体験をしながらも予定通りのコース・日程で順調に登山ができた。緻密な計画をたてて下さった大川さん、現地での手配や折衝・適切な指示を与えてくれた李さん、高所ガイドの明銘さんそして親切な現地スタッフのみなさんに感謝しお礼申し上げます。

中国を読む③⑥

ものがたり 史記

陳舜臣著(朝日新聞社朝)

久しぶりに「史記」の関連本を読む。すでに私は30代目前。ままならない自分を知ってしまっている以上、当然かつて夢にあふれた高校時代に教科書で読んだときとはまったく違った趣で史記の人々が目に映る。

例えば伯夷叔齊。義を重んじ、理想に殉じ、あっさりと死んでしまう兄弟の生き様を高校生の私は美しく思ったものだ。同じくだりを大学の授業でやったとき、教授が「善行は報われないもの。善い人になるには覚悟が必要」と言い切っていた。含蓄深い…。いまの私がしみじみと思うのが、この二人の世渡り下手さ。海水に放り込まれた淡水魚のように、純粹であるがゆえ世の中の汚濁に生きられなかった。

有名な項羽と劉邦。10代の私は項羽を愚かしく感じたものだが…。実際、項羽はできた男であったがゆえに、他人の声に耳を傾けられなかった。自信があることに対して、人は他人の意見を疎ましく思うものだ。対して劉邦は仲間の力を最大限活用する

ことで、自分の能力を超える仕事をした。たやすいようでいて、他人の力を活用することがどんなに難しいことか…。臥薪嘗胆の故事の由来になった楚人の執念も、そこまでの熱い思いがなければ遂げられないこともあると、なんとなく理解できる。

自身に対しても司馬遷は、「人間に受けた傷こそが、著述の原動力」だと分析を下している。また鋭い洞察力とあわせて、作中の人物に対してやさしさも持ち合わせていると、陳氏は語る。悪者とされている人には弁護を、マイナス面は、その人物の伝記とは違った項目に入れるなど編集面にも彼の優しさは現れて、この大作はできあがっている。

2000年以上の時の洗礼を受けても生き生きと、なにひとつ現代と変わらない真理を描く名著は、読む人が年齢を重ねたり、立場や状況が変わっても、読者に一番適したメッセージを投げかけてくるに違いない。

(真中智子)



かつて中島みゆきのレコードを夜通しで聴き、“別れ歌”や“ひとり上手”のせつなさに涙をはらはらと流し、じつくりと彼女の世界に浸ったものだ。何故か翌日は心がすっきりと晴れ、元気が出てきた。涙がストレスを吹き飛ばすのだろうか…。今は、韓国ドラマの底なし沼に嵌り込んでいる。泣き腫らした臉はまるで縄文の女王、遮光器土偶だ。

『韓流』という言葉は中国語圏から始まった。中国、香港、台湾、シンガポール等、東アジアの国々では日本より早くブームになっていた。日本では『冬のソナタ』が火を付け、レンタルビデオショップの売れ行きは急上昇し、ハングル講座と韓国旅行者は、今も右肩上がりと聞く。NHKのみならず民放各社も、放映権が高値になったと聞くものの、テレビ欄では韓国ドラマ・映画、そして韓国の俳優の名前を見ない日はない。

90年代には日本の大衆文化が東南アジアを席卷きしていたというが2000年代は、韓国の大衆文化がそれらの国々で開花している。日本では『冬のソナタ』はすっかり卒業し、ペ・ヨンジュン以後、若手や中堅俳優たちのせつなく、悲しく、狂おしい波乱万丈ドラマに歴史上の人物の大河ドラマ、そして『私の名前はキム・サムスン』に代表される頑張る女性のラブコメディなどなど、多様化の時代に入っている。しかし、韓国への偏見・蔑視はかなり少なくなったものの、韓国ドラマには無関心か、さらには嫌韓流も根強い。

1994年SBS放送の『砂時計』は、1980年民主化の礎となった光州事件を作品の主要なテーマとして扱っている。70年代から90年代の韓国の現代史を背景に2人の青年と1人の女性の運命を描き、視聴率が60%を越えたという韓国ドラマの金字塔なのだ。政界の腐敗や汚職、学生運動と思想統制、激しい弾圧の中での恋。検察官になり正義と信念を貫く青年と裏社会に生きる青年、幼馴染の2人は偶然にも、全羅南道光州市で対峙することになる。1980年5月18日～27日、光州市民たちは戒厳令の撤廃、全斗煥の退陣、金大中の釈放を求めて立ち上がるが、軍によるデモ隊への無差別発砲により、流血の惨事になる。市民も武器を取り、一時は戒厳軍を追い出

すが軍の武力によって鎮圧されてしまう。心優しき正義の人は戒厳軍の一人として、裏社会の彼は、軍による暴力と無差別発砲を目のあたりにし、市民と共に立ち上がる一人として。

時代が流れ、検察官と被疑者として2人は拘置所でまみえる。殺人の罪人に対して自分は求刑する資格はないと、光州での自分を告白する検察官の苦悩に、「いや、お前こそが俺の裁判に関われ」と応える彼…。最終回では検察官とかつて恋人であった女性が山の上から彼の遺骨(灰)を静かにまくシーン。「本当によかったの？彼を死なせて…」と問う彼女、「分からない…、時がその答えをしてくれるだろう…」と語る彼。そして、この24話のドラマは終わる。

光州事件は“光州民主化闘争”として、1988年の国会で参加者や被害者の名誉回復がなされ、更に1995年の特別法により、当時の大統領や軍将校が裁かれることにより完全に名誉回復を遂げた。

2005年の映画『トンマッコルへようこそ』は、朝鮮戦争の最中、俗世と隔絶された山中の桃源郷・トンマッコル村に迷い込んだ、南の兵隊と北の兵隊、そしてアメリカ兵の3者がいがみ合いながら、いつの間にかこの村を無差別砲弾から命を賭けて守りきる、という物語だ。それぞれの軍の理想とかけ離れた現実が暴かれる。この映画で、そして『砂時計』のようなドラマで真実を訴える韓国ドラマ人たちに思わず喝采をしてしまう。

“出生の秘密・不治の病・事故”という韓国ドラマ3原則は作品の総数の中では少ない。逆境の中でも臆せず胸を張って生き抜くチャングムやクッキ、封建時代の身分制度に苦しみながらたゆまぬ努力で医師になり、朝鮮の山野に自生する薬草を分類、明の漢方書を編集した心医『ホ・ジュン』の物語、『商道一サンド』はイム・サンオクの正しい商売人としての道を説く。奴隷の身分でありながらあらゆる困難を克服、統一新羅時代に中国・日本との海路を切り開き、『海神一ヘシン』と呼ばれたチャン・ボゴ。根底に流れる儒教の深い思想・哲学。思い込みの激しさやしぶとい愛の押し付けもあるものの、珠玉の名セリフに涙しながら今日も又眠れぬ夜を過ごすのだ。

日本が午後3時のを迎える頃、遠くアフリカの地でひっそりと開くマーケット。今日は、マーケットといっても、アフリカの証券市場のお話をしたいと思います。戦争、貧困問題、難民問題、エイズ等々の報道に事欠かない先進国から見るアフリカの様子は、人々の暮らしもままらないのではないかと想像するのに十分です。しかし、アフリカ大陸に広がる17の証券市場の毎日の値動きを追ってみると、確かに経済活動は行われており、人々は生活をしているのだという息づかいが感じられます。証券市場を有する国々は、コートジボワール、ボツワナ、エジプト、モロッコ、タンザニア、ガーナ、南アフリカ、ウガンダ、ザンビア、マラウイ、モザンビーク、ケニア、ナミビア、ナイジェリア、モーリシャス、スウェジランド、ジンバブウェであり、イギリスの旧植民地の国々に多いのが特徴です。

ただ、東京、ロンドン、ニューヨーク、香港等の先進国にある証券市場の情報が瞬時にインターネット等を通じて知ることが出来るのに対して、アフリカにある証券市場の情報は私のような一般の人にとっ

てすぐには手にいれることが出来ないのが現状です。そのほとんどがホームページなどを持っていますが、タイミングや速度の遅さもあります。故障していることもあります。こんなにも情報が瞬時に取れる時代であっても、アフリカの市場にまだまだ距離を感じてしまう要因です。もちろん日本の新聞・テレビには載らないし、熱心に探さなければ見つからない情報です。とはいってもインターネットのおかげで、一日の取引の様子や、値動き、売買高、市場担当者のレポートや過去数年分の情報等知ることも出来るし、質問があれば各証券市場にメールを出して、返事をもらうことも出来るのです。

今日はケニアのナイロビ証券市場を紹介したいと思います。イギリスの植民地であったころの1920年代からその原型があり、その後1960年代にケニアが独立を果たすまでの間一部の人々の手で運営されていたようです。独立後1980年代に、国営企業の民営化を目指す中、民間企業が果たす経済発展の役割が認識されるにつれ、証券市場も政府の力によって整備されていきました。最初の民営化企業は、1988年のケニア商業銀行で、政府が20%の株式を公開しました。また1996年にはケニア航空の民営化に成功し、11万株を公開し、その年の世界銀行から民営化の成功例として表彰も受けています。そして現在にいたるまで、法整備、投資環境整備等が政府の主導で行われています。

ナイロビ証券市場には、電気、ガス、水道、通信、交通等のインフラストラクチャー関連、農産物関連、外資系(日用品、食料品、セメント等)の53銘柄があります。先進国の市場に比べると取り扱い銘柄は多いとはいえませんが、確かに経済が営まれているという事実を知るには十分な数字であると思います。

ナイロビ証券市場を見学した時の様子を紹介したいと思います。ケニアの政府系新聞「NATION」はケニアで最も読まれている新聞ですが、その新聞社も入っているネイションメディアセンターというのが、ナイロビの目抜き通りにそびえていて、そのタワー



丸い円筒の建物がネイションメディアセンター

の一角がナイロビ証券市場です。

一階の受付で訪問理由を述べ、ネームカードを付けて、荷物チェックを受け、空港にあるような金属探知機のゲートを通過して入場となります。そこで、働く人達の服装は、真っ赤なジャケットと、黒いズボンかスカートで、すごく派手な格好です。声を荒げて、がやがやとした場内です。活気がありますが、テレビでよく見るニューヨークの証券市場のように、たくさんの人々でごった返し、せわしなく人々が動いているという様子ではありませんでした。取り扱い銘柄がそんなに多くないということもありますが、どことなくのんびりとした感じがしました。もともと何かに急かされて、急いでやるのは好きではない国民性がでているのでしょうか。

値動きを暫く追ってみますと、その動きが非常に大きいというのも特徴だと思います。日本のマザーズやヘラクレスといった新興の企業の市場のような動きです。そして右肩上がりの銘柄が多く、売買高は、先進国のように大きくありません。そもそも参加している人の数が圧倒的に少ない。ケニア国内で、一日ドル以下で生活する人々も多く、貧困層が大多数の国です。アフリカ最大というキベラスラムも車で20分ほどの目と鼻の先であります。結果、ナイロ

ビ証券市場のお客はケニアの政治家、企業家、資産家、外国人投資家に限られているでしょう。投資する側からいえば、まだまだアフリカの市場は安定しているのかどうか疑問ですし、インフラストラクチャーの遅れ、リスクという点で安定した投資先というわけではないでしょう。

しかしほとんどがそれぞれの分野で独占企業という立場であり、価格やサービスで競争していくという状況になるに時間がまだかかると思います。また国営企業の民営化の動きもさらに進んでおり、注目こそされることは少ないですが、いい投資先ではないかというのが私の印象です。先ごろ、ケニア電力が民営化されました。私も初めて公開買い付けに参加しました。一株12ケニアシリング。3085株を日本円にして5万8615円で買いました。そして数か月後の現在、一株32ケニアシリングになっています。

アフリカには、まだ多くの証券市場があります。知られてない市場があります。途上国企業、特にアフリカ出身の企業家も増えてきています。そういう企業を私は応援していきたいという気持ちで投資していきたいと思います。あまり痛い目には会いたくない程度に。

nián huā wēixiào
松本杏花さんの俳句《拈花微笑》より

霧の香の流れては消ゆ花径かな

wù ǎi fú fēn fēn
霧霽浮芬芬

shí piāo shí xiāo shí liú tǎng
时飘时消时流淌

huā jìng zài jìn páng
花径在近旁

季语：雾、秋

霧中水分较多、能将香气浮起、微风吹来、似香河流淌。大概此时的风向不定吧！那香气忽而飘来、忽而消失、只缘有时是从花茎穿越而来、有时是从面前向花茎流去。

着飾りし中秋節の子の笑顔

yī shì jīn shí chuān
衣饰今时穿

zhōngqiū jiājié dàtuányuán
中秋佳节大团圆

háitóng zhàn xiàoyán
孩童绽笑颜

季语：中秋节、秋

此首俳句是在中国旅游时所作。如今的农村、不仅能在中秋节吃上月饼、而且还在穿戴方面讲究起来、的确是一个飞跃。看到打扮一番的孩子们的张张笑脸、宛如中秋的皓月一样明朗、显现出了所到之处丰衣足食的小康景象。

キャンディロードの蒸気機関ロードローラー

スリランカの主要幹線道路の舗装率は、アジア各国の中でも高い事をご存知でしょうか？ スリランカの主要幹線道路について簡単に説明すると、日本の国道に該当するAグレード道路、それに準ずるBグレード道路、その他のマイナー道路に区分されています。例えばA1はコロンボ～キャンディ間、キャンディロードと呼ばれています。日本風に呼べば国道1号線になります。A2はコロンボ～ゴール～ハンバントータ間でゴールロードと呼ばれています。

道路の舗装率が高い理由は、1815年から始まった英国の植民地時代に、主に紅茶やスパイス等の輸出用産物の運搬と、英国人達が避暑地に向かう為に道路舗装を進められた結果です。現在でもこの時代の舗装面が使われている道路が多くあります。道路だけでなく多くの橋もこの時代に架けられています。

興味のある方は、橋の欄干等を注意深く捜して下さい。製作年代と製作会社、製作場所等が記されたプレートを見つける事が出来ます。そのプレートには1800年代の年号とロンドンなど英国の地名と会社名が書かれているはずですが、但し、橋の下に行く時には上ばかり見ていないで足元にも注意してください。地方に行くと橋の下は公衆トイレ代わりに使われている事が多いからです。

この時代にどの様にして道路舗装工事が進められていたかと云うと、現在と殆ど同じ様な建設機械を使って工事が進められていました。

それではこの時代の建設機械の動力は何だったと思われませんか、まさか象や牛が引っ張っていたなんて考えないで下さい。当時は蒸気機関が使われていました。蒸気機関車と原理は同じで、石炭や木材を燃料として動いていました。みなさんのご近所で道路舗装工事をしている場所があったら、少しの時間でかまいませんから観察して下さい。様々な建設機械が活躍していますが、その中でも一番目を引くのは大きな鉄のローラーを前後に装着したロードローラーです。大きなローラーをゆっくりと前後に回転させる事によって舗装面を押し固めていきます。日本では江戸時代末、

東海道をはじめ多くの街道が未舗装だった頃です。下に～下に～なんていう掛け声で大名行列が行き来し、「熊さん」や「八っさん」が御伊勢参りをしていた頃に、スリランカでは既に蒸気機関のロードローラーを使って道路の舗装をしていたなんて想像できましたか？

スリランカ中央高原地帯にあるキャンディは15世紀後半から約350年の間、都があった古都で、日本でいえば京都にあたる場所です。ここにはお釈迦様の歯を収めている事で有名な仏歯寺という寺院があり、現在でも観光客の殆どが訪れる観光地として知られています。又、キャンディから南に約65km進むとヌワラエリアがあります。ヌワラエリアは英国植民地時代に日本でも有名なセイロンティーの産地として、又、在留英国人の為の避暑地として発展しました。

1889年にアジアで最初にオープンしたヌワラエリア・ゴルフクラブが有名です。ヒルクラブやグランドホテル等の古い英国スタイルのホテルが当時のままの雰囲気を残して営業を続けています。夜になると気温は10度以下になる事もあります。ロビーの暖炉では薪に火がつけられ、部屋にはベッド用の湯たんぽが配られます。

ヌワラエリアは僕の好きな場所の一つですが、コロンボに住んでいる外国人の中には土曜日または日曜日の早朝にコロンボを出発して、日帰りでゴルフだけをしに行く人もいます。そんなに急がないでゆっくりしていけば良いのにも思いますが、皆さん色々忙しいのでしょね。

コロンボとキャンディを結ぶキャンディロードは全長約110kmあります。この道も前記の理由で、キャンディを経由してヌワラエリアに行く幹線道路として舗装工事が進められました。現在のキャンディロードの沿線では、コロンボの市街地を抜けると数キロ毎に現われる街並み、田園地帯、パイナップル、ココナツ等の果樹園、賑やかにカシューナッツを売る女性達、ヤマアラシやオナガザルを連れた大道芸人達を見る事が出来ます。100年以上前の沿線がどんな風景だったかは想像するしかありませんが、未開発地域が多く

様々な動植物が見られたと思われます。

そんな中を、機関車トーマスを連想させる外観のロードローラーが煙を漂わせて、道路を舗装しながらキャンディを目指してゆっくりと進んで行った光景はなんともユーモラスですね。当時使われていた、蒸気機関の建設機械は現在でも見る事が出来ます。キャンディの少し手前の曲がりくねった坂道を登りきって、しばらくするとスリランカ国鉄の踏み切りがあります。ここを渡った直後の道路の右側にハイウェイ

ミュージアムと小さな公園があり、ここに数台の蒸気機関の建設機械が展示されています。

建設業の方はもとより、歴史に興味のある方、時間に余裕のある方には仏教遺跡等とは一味違ったスリランカの歴史の一コマとして、お薦めの場所です。展示物を見ながら当時の舗装工事の様子思い描いてみてください。そして英国の厳しい植民地政策の下で、この舗装工事のために過酷な労働を強いられていた人達がいた事も忘れないで考えて下さい。

僕とスリランカの出会い

赤岡健一郎

ある国に興味を持つようになるのは、普通は特定の音楽、食べ物、スポーツ等の文化、動植物などを含めた大自然、宗教や研究対象国として興味を抱く事だと思えます。ところが僕の場合は、本人の意向とは無関係に駐在員としてスリランカに赴任したことによります。

通常、駐在員は任期が決まっているか、特定のプロジェクトに従事するために赴任します。任期が終了するか、プロジェクトが終了すれば帰国または次の国に移動します。そのために、多くの人は駐在している国への興味は薄く、文化や自然に触れる事も無く、駐在員同士のお付き合いに終始してその国を去ります。次の任地で役に立たない現地語は覚えようとしませんが普通です。

僕がスリランカに関わるようになったのは、建設会社の海外本部に所属していた時の事です。何力国かの駐在経験を経て、海外本部にもどり管理職になって数年経ち、もう駐在員として海外に出る事はないだろうと思っていた矢先でした。ところが、その年の年度終わりに行われた会議の席上で本部長から、赤岡君はスリランカに転勤と、突然言われたのが始まりです。勿論、日々の通常業務として毎日のようにスリランカに電話やメールを送っていましたが、それはスリランカだけでなく他国へも同じでした。それまでの業務でも、スリランカの特定のプロジェクトに深く関わってはいなかったのが驚きました。勿論、スリランカに何の思い入れもありませんでした。

転勤はいつも突然で、駐在員として始めてマレーシアに行った時は2週間前に言われました。この時は歯医者に通っていて、歯を半分削ったまま転勤し、結局2

年半後に帰国するまで歯はそのまま少し摩滅してしまいました。こんな風にスリランカに赴任しましたので、赴任当初は、仕事以外では駐在員同士の週末ゴルフや食事会に明け暮れ、仕事がらみのスリランカ人の他は全く現地の人との交流はありませんでした。

ところがコロンボ市内で唯一のゴルフ場が従業員のストライキで3ヶ月間閉鎖になり、ここでのプレーが出来なくなりました。スリランカの中央高原には、アジアで最初に開業したヌワラエリアゴルフ場があり、無理をすればコロンボから日帰りでゴルフが出来ます。でも、もともとゴルフがそれほど好きだった訳ではなく、週末の暇つぶしとしてプレーしていただけだったので、ヌワラエリアまで行くのは面倒でした。同じ様な考えの人がいて、遠出するならスリランカの地方を回り、自然や遺跡、田舎を見て、いろいろな物を食べようということになりました。

スリランカ各地を自分で車を運転して回った結果によって、僕はスリランカの魅力を発見し強く惹かれるようになったのです。つまりゴルフ場のストライキが僕にスリランカの魅力発見のきっかけになったといえるでしょう。‘わんりい’に連載させて頂く話はこの頃の経験と、最近情報を兼ねています。

ただし、僕が駐在していた時期はスリランカでは内戦が激しい頃で、特に北部の「文化の三角地帯」と言われる地域は戦闘の最前線にあり、昼と夜では支配勢力が変わると言われる地域だったので、何度か怖い目にも会いました。この話は長くなるので別の機会に紹介させて頂こうと思います。

第16回中国文化の日 江西・貴州に中国芸能のルーツをたどる

中国の仮面展と仮面劇

主催：(財)日中友好会館／協力：中国民間文芸家協会・全日本空輸(株)



貴州省の仮面

◆中国の仮面展——展示の部

- 会場：日中友好会館美術館 入場料：無料
- 会期：2006年10月1日(日)～10月22日(日)
開館時間：10:00～17:00、10月20日は21:00まで
休館日：10月3日(火)、10月10日(火)、10月17日(火)

◆中国の仮面劇——公演の部

- 日時：2006年10月20日(金)、10月21日(土)、10月22日(日)
- 会場：日中友好会館地下1階大ホール
開演時間：20日19:00～、21・22日15:00～
▶上演時間：約50分 ▶開場：各回開演20分前
- 演目：[江西] 開壇、和合舞、儼公儼婆など [貴州] 単騎千里を走る(三国演義より)、楊六郎大戦張彤(楊家将演義より)
- 入場料：300円(定員250名、全席自由の豊席) ▶当日券(400円)は空席がある場合のみ発売
前売りチケットは完売いたしました。

○お問い合わせ (財)日中友好会館 文化事業部 TEL.03-3815-5085 http://www.jcfc.or.jp/event/general_bunkanohi.html

【お出掛けください】

第8回 町田発国際ボランティア祭

2006 夢広場 —参加：無料

●本会場：町の駅「ぼっぼ町田」

JR横浜線ルミネ側改札口徒歩3分/小田急線町田駅南口徒歩5分町田東急デパート裏109ファッションビル裏通り

2006年11月4日(土) 10:00～16:00

今年度の祭テーマは「食と文化」。ぼっぼ会場はエスニック料理いっぱい! 民族芸能いっぱい!

●第二会場：まちかどギャラリー

町田市原町田4-6-8

11月3日(金)～5日(日) 11:00～17:00(予定)

実行委員会会員の企画展と物販

主催：2006夢広場実行委員会/共催：財団法人町田市文化・国際交流財団

▶問合せ：042-722-4260 2005夢広場実行委員会・町田国際交流センター

町田発国際ボランティア祭「夢広場」は、国内国外を問わず国際支援と友好の活動を続けている、国際ボランティア団体の交流の場です。1998年以来毎年秋に開催され、今年は9回目を迎えました。

「夢広場」本祭の当日は、町田市内外の30を越す団体が団体が集い、それぞれの団体が支援・交流している国の民芸品や料理材料の店や、飲食の模擬店を出展。一方、仮設ステージでは華やかな衣装の民族舞踊や民族音楽の演奏などが上演されるなど、お出掛け頂ければ、きっと世界の国々が身近に感じられる楽しい一日になるでしょう。

‘わんりい’の会も出展します。皆さんの応援をよろしく願います。



インペリアル・ポースレン・オブ・清朝 —華麗なる宮廷磁器—
日本で随一の静嘉堂の最高級清朝陶磁コレクションを一室に展示

於：静嘉堂文庫美術館

〒157-0076 東京都世田谷区岡本2-23-1
TEL. 03-3700-0007

- ◆2006年9月30日(土)～11月26日(日)
月曜日休館(但し、10月9日開館、10月10日/火が休館)
10:00～16:30(入館は16:00まで)
一般800円 大高生500円 小中学生100円
- ◆講演会10月28日(土)13:30～ 先着150名
於：地階講堂にて「清朝陶磁の魅力」
長谷部 楽爾氏(東京国立博物館名誉館員・出光美術館理事)
- ◆列品解説 於：展示室
10月7日(土)・11月18日(土) 11:00～
10月12日(木)・11月9日(木) 午後2時から
- ◆スライド解説 於：地階講堂
10月21日(土)・11月25日(土) 14:00～

*10月21日に、日中藝術研究会例会として参観します。
問合せは日中藝術研究会(nichigeiken@yahoo.co.jp)へ。

中国の楽器—その音の広がり—②

【中国琵琶とギターの競演】

同じような音色を持ちながら確固とした違いを持つ
中国琵琶とギターの競演

- 出演：徐善祥(中国琵琶) 中林淳真(ギター)
▶友情出演：テレサ林(カステネット)/馬平(パーカッション)
マリー・リー(ピアノ)
- 於：HAKUJU HALL 〒151-0063 東京都渋谷区富ヶ谷1-37-5
最寄り駅：代々木公園駅(千代田線)、代々木八幡駅(小田急線)徒歩5分
- 2006年10月9日(月・祝)14:00開演(13:30開場)
- 5,500円(前売り)(当日:6,000円)全席指定
申込・問合せ：ラサ企画 TEL/FAX 03-5748-3040

10月定例会：10月21日(土) 14:00～

おたより発送：10月30日(月) 13:30～ いずれも 田井宅